



Catarina Artbark (カタリナ・アートバーク)

ていーえー



こんいち  
Kiā Oraī

この言葉はマオリ語の挨拶。私の国、ニュージーランドは英国連邦の一つで、公用語は当然英語だけど、私の国では一般的よ。ハワイの、ALOHĀ、と同じような言葉でことで覚えておいてね。

ちなみに私の国の名刺をマオリ語で表現すると、AOTEAROA

「白く長い雲のたなびく地」という意味。きつと、遠い遠い昔、そう、私達の祖先である移民人とポリネシア系開拓民（マオリ族）との間で交わされたワイタンギ条約が結ばれた日よりもっともっと遠い昔、大海原を超えてやってきた彼等の祖先が、この美しい島を見つけた時に発した言葉なんだと思う。

私は町はずれにある、大きな窪地の斜面に寝転んで、流れる雲を数えていた。

時折、雲の合間を縫って飛行機が海の向こうを目指して飛び立ち、そして海の向こうからやってくる。

海の向こうからやってくる人々は、この国の美しさを堪能してほしいし、海の向こうへ旅立つ人々は、この美しい島を目指して無事に帰ってきてくれることを願う。

——外国かあ……、行ってみたいなあ。

インターネットさえあれば、世界中のどんな場所でも映像として見る事ができる。図書館に行つて地図を広げ

ば、見知らぬ場所に思いを馳せることができる。

どこの国に行くかとかは思いつかないけど、生まれてこの方外国に行つたことが無い私は、海の向こうに広がる世界に漠然としたあこがれがあった。

上空を飛び交う飛行機は、私が抱えるあこがれや空想を抱えて運んでいく。

学校が終わつてから自転車で十分足らずのこの場所。

私のお気に入りの場所。こういった場所は、オークランドに点在している。

信じられないかもしれないけど、私が寝転んで空を眺めている場所、大昔は火山の噴火口だったのよ。今は噴火する心配もないから、こうやって私を含む町の人々の憩いの場として存在している。

雲を眺めていたら電話が鳴つた。画面を見ると、「先生」だった。

『カタリナ。今ちよつといいかな？』

「いつもの場所。そろそろ帰ろうと思つたんだけど。急ぎ？」

『明日八時、迎えに行く』

「植物採集ね？ いいわ。用意して待つてる」

『行先はいつもの山だ。』

「まあ、先生つたら心配性なんだから。だいじょーぶですよ。サンドフライサンドフライに刺さされないように気を付けますつてば」

『あとファンテイルの掴み取りも禁止だ』

「わかってますって」

『よし決まりだ。車で迎えに行く。それじゃ』

「また明日！」

明日は土曜日。学校は休みだけど、私が通うハイスクールの担任の先生と二人で出かける予定が立った。いわゆるフィールドワーク。目的は植物採集。私の担任の先生は生物の先生。ちよつと堅物なところがあるけどね、ダンディで、優しく、頼りになる存在。私は時々、先生の手伝いのために一緒に山に入って植物採集をしに行っている。

ああそうだ。さつきの電話で話したこと。少しでも教えてあげる。

知ってる？ ファンテイルという鳥は、人を恐れず、山に立ち入ると、懐っこく近づいてくる。私の手のひらに収まるくらいに小さな鳥で、尾羽が扇の形をしているからその名前が付けられた。とにかくとっても可愛い鳥なのよ。その羽ばたきが忙しい割には、飛ぶスピードはあまりにも遅くて、「先生」が言う通り、手づかみで捕まえられるくらい。それがなんとも可愛いのだ。

ああ、この国の人々は皆知ってるよね。

あたしが生まれ育ったこの国は、自然が育んだ美しいもの、可愛いものに満ち溢れているの。

人懐っこく飛んでくる小鳥。

果たして本当にあの小鳥達は人間に懐いているのか？

それは人間達がそう思っているだけで、あの小鳥達は自分達のナワバリに侵入した外敵に対して必至に攻め立てて来ているとしたら？

猛禽類のような嘴も、鋭い爪もない、か弱い小鳥。

山に立ち入る者を囁りと共に迎えてくれる小さな鳥達。

そう、それだからこそ、守らなければならない。ファンテイルだけではない。この国固有の美しい自然は、この国の人間が法律の名の下に厳しく守って来た。

ミルフォードサウンドの溪谷、サザンアルプスの山並みと大原生林、レイク・ワカティプの澄んだ輝き、大地の鳴動を轟かすロトルア、そして私の街、オークランドの火山群は大地が生み出した造形物。

夏も冬も春も秋も、その全てが美しい我が国。

その美しい大地に、飛べる鳥も、飛べない鳥も、表向きは平和に暮らしている。

けれどもこの国の大地にはそんな彼らを脅かす敵は外部から紛れ込んだ害獣がいる。その害獣を駆除する仕事もね、実はあるんだよ。ウエリントンに住んでる親戚のおじさんも、この国固有の動物を守る仕事をしているの。

そう、この国には害獣がいる。外の国からいつのまにか

やつてくる奴ら。

害獣は二種類いる。

本当の害獣と、ヒトの形をした害獣の二つだよ。

森林保護レンジャーは船便に紛れて繁殖し続ける害獣を殺す。彼らはヒトの顔をした害獣は殺せない。人殺しは犯罪だもんね。

さて、ここでクエスチョン。

ヒトの顔をした害獣を殺すのは誰の役目？ 警察？ 軍？ 違うよ。

とーぜん、誰にも言えない秘密の仕事。

ハイスクールのクラスメイト達にも秘密。私の両親と、

「先生」しか知らない秘密の仕事。

私には誰かを傷つける力はない。

けれど、そいつらを殺すための手段だったら、ある。

我が国が世界に誇る美しき自然の力を侮っちゃいけない。

あたしはファンテイル。

鋭い嘴も、爪も持たない小鳥。

その小鳥がお前を殺す。

この島に住む、私という小鳥がお前にとつての死神だ。

そしてお前の名前も何もかもが公表されずに消される。覚悟して。

あたしは起き上がり、午後の青空に向かって背伸びをした。

「明日が楽しみね！」

---

---

## Catarina Artbark(カタリナ・アートバーク)

発行日 2019年8月22日

著者 ていーえー  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=218473>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---